

褒めて育てる

。。。なんの話かという？
2016年9月21日原子力関係閣僚会議で
「核燃サイクルは推進するけど、もんじゅは廃炉の方向で」
という方針が決まったことを受けて、
2016年9月23日に日本原子力学会が出した見解

高速増殖原型炉もんじゅの有効な活用について

(参考資料①)

に、本当に書いてあるフレーズです。
ちなみに

日本原子力学会

会員数 7,297名
賛助会員 230社
2015年度末

(参考資料②「第6回総会資料」)

定款にある目的を

(参考資料③)

原子力の平和利用に関する学術および技術の進歩をはかり、
会員相互および国内外の関連学術団体等との連絡協力等を行ない、
原子力の開発発展に寄与する

から

福島事故後の2013年に次のように変更

(参考資料②「定款」)

公衆の安全をすべてに優先させて、
原子力および放射線の平和利用に関する学術および技術の進歩をはかり、
その成果の活用と普及を進め、もって環境の保全と社会の発展に寄与する

そんな原子力学会が出した見解を見ていきます。
まずは要約

(参考資料①)

もんじゅは、
我が国が高速増殖炉を実現する上で
重要な安全上の知見や技術の向上をもたらす研究開発施設であり、
原子力規制委員会の勧告、
「もんじゅの在り方に関する検討会」の提言を踏まえ、
適切な体制のもと、無理をせずに段階的に出力を上げ、
運転、保守点検の実績を重ね、その有効利用を図るべきである。
真の技術力は、
発生する課題を克服しつつ行う自主開発でしか培うことはできない。

そして

(参考資料①)

もんじゅが（中略）殆ど運転できていない理由は、2次系Na漏洩事故時の対応のまずさや慣れない保守管理面での問題もあったが、新技術の開発につきものの初期トラブル、集中投資を妨げる予算制約、そして国と地方自治体の間での議論など外的要因も見落とせない。工学技術は、試行錯誤と失敗の経験に学び熟成して行くものである。叱責するよりも褒めて育てることも効果的な教育方法の一つである。

さらに

(参考資料①)

組織経営に課題ありとされるが、文部科学省のもんじゅの在り方に関する検討会が本年5月に提言した「もんじゅの運営主体の在り方について」に従い、**早急に運営主体の見直しを行うべき**である。

(参考資料①)

もんじゅの運転再開にかかる費用が巨額であるとの報道があるが、国の将来を左右する技術の開発に大きな研究開発投資を行うことには**やむを得ない面があり**、またその必要性について国民の理解を得る努力を尽くすべきである。

(参考資料①)

新型炉の保全管理システムは、実機適用経験を通じて確立できるものであって、その機会を失ってはならない。仏国のASTRID計画への協力は是非とも実施すべきであるが、それをもって国内に建設し実質的に完成しているもんじゅに代えられる**と考えることには原子炉開発上のリスクがある。**

最後に一言

「褒めて育てる」って、当事者側が言っちゃダメでしょう。。。そもそも原子力の技術はその他の工学技術と違って、最悪の『失敗』の影響が想像を絶してしまうため、「試行錯誤と失敗の経験により熟成していく」ということはできないのでは？

福島事故後、学会の目的に『公衆の安全を全てに優先させる』とわざわざ追加してるのに「技術ってのは失敗で学んでいくもんなんだから、怒るんじゃなくて、褒めて育ててやってよ」って言うてるわけで、この目的の変更がただのパフォーマンスで、本当に心から考え直したわけではなかった、ということがよおーくわかります。従来の技術と同じやり方が許されないのが原子力の技術。少なくとも「事故ったら後がない」という覚悟のない人が扱っちゃダメなものだと思います。

参考資料
①日本原子力学会HP 高速増殖原型炉もんじゅの有効な活用について（見解）
http://www.aesj.net/post_pr20160923
②日本原子力学会HP 公開情報
http://www.aesj.net/about_us/公開情報
③日本原子力学会旧HP（文書への直接リンク）
<http://www.aesj.or.jp/introduction/teikan20110401.pdf>